

智儼における解・行の変遷

櫻井唯

一 はじめに

解・行とは、一般的には教義の理解と観法の実践の意であるが、華嚴教学における解境・行境は仏の境界を意味し、『華嚴經』の世界観を表す重要な概念の一つである。⁽¹⁾ 本論では、華嚴教学の基礎を確立した智儼(六〇二〜六六八)の著作における解・行という概念の変遷を明らかにすることで、それが智儼自身の思想展開に及ぼした影響について考察する。

二 『搜玄記』、『孔目章』における解・行

まず、智儼の最初期の著作である『搜玄記』と、晩年の『孔目章』における解・行の用例を確認したい。

① 十平等法の解・行

『搜玄記』の六十『華嚴』十地品・第六地の註釈中では、次のように解・行の語が用いられている。

明⁽²⁾十平等法、有⁽²⁾二種意。一、解境。二、行境。言⁽²⁾解境⁽²⁾者、即此十門為⁽²⁾所軌法。不住道下、明⁽²⁾所依行⁽²⁾觀門方便。言⁽²⁾行境⁽²⁾者、即十平等是⁽²⁾觀解初。不住道下、明⁽²⁾觀成相⁽²⁾。

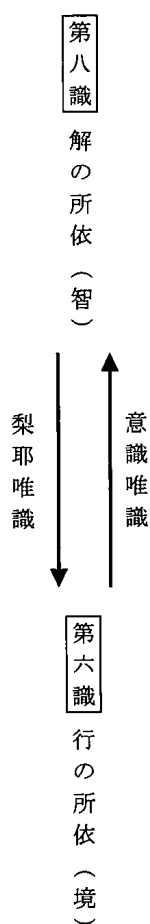
六十『華嚴』では、第五地を具足した菩薩は十平等法を觀じ、「不住道」より下、すなわち「亦不⁽²⁾住⁽²⁾其中⁽²⁾。欲⁽²⁾具⁽²⁾足無上菩提法⁽²⁾故。」以降に説かれる十種三昧を得て、第六地に入るとされている。⁽³⁾ 智儼は、十平等という觀法とその結果得られる十種三昧の關係について、十平等を所軌の法、三昧を依りどころとなる觀門の方便と見るのが解境であるとする。それに対して、行境では、十平等は觀法によって得られる解の初段階であり、三昧は觀法が完成した相であるとしている。この第六地の經文は、解境においては修行者が依るべき教えとして客觀的に理解され、行境では主觀的な体験の記述として把握されるのである。ゆえに、ここでの解境・行境は、修行者の理解と実践の意味で用いられていると考えられる。

②二種唯識の解・行

また、同じく『搜玄記』の第六地に対する註釈において、唯識には梨耶唯識と意識唯識の二種があることが説かれ、その中で解・行の概念が用いられている。⁽⁴⁾

唯識者有二種。一、梨耶識、持生諸法、離識即無。二、明意識唯識。生死涅槃、染淨等法、現_レ在意地、離_レ識即無。梨耶唯識、始是解境、非_レ行所依。意識唯識、此終即是正解所依。心終、意始、反_レ前可_レ知。⁽⁵⁾

梨耶唯識は第八識が種子を持つことで諸法が生ずるといふ側面から唯識を説き、意識唯識は第六識に諸法が現在しているという状態から唯識を説くものである。両者の関係は次のように図示できる。



第八識は解の所依である智慧と等しく、第六識は行の所依、すなわち修行という行為の依りどころである現象世界として捉えられる。なお、智儼は『孔目章』でも二種唯識について言及し、ここでは二種唯識とは解唯識と行唯識であるとしている。⁽⁶⁾ このことは、『搜玄記』の第八識と第六識の関係を、『孔目章』では解境と行境の関係として再定義したためであり、これは晩年の智儼にとって解・行の概念がより重要な

智儼における解・行の変遷 (櫻井)

ものとなったことを示唆していると考えられる。

③二種十仏の解・行

『孔目章』に説かれる解境・行境の二種十仏説の成立については、すでに木村清孝氏による詳細な研究があるため、⁽⁷⁾ ここではその成果に基づいて、簡単にその内容を確認しておく。まず、解境十仏とは十地品に説かれる衆生身より始まる十種の身を指し、これは第八地の菩薩が知り、また所化の衆生に随って現すところの身であるとされる。行境十仏とは離世間品において菩薩が行の完成時に見る仏であり、「根源的な仏そのもの」を意味しているという。この二種十仏説における解境・行境は、仏の境界という意味を有するという点で、『搜玄記』の解・行とは明確に異なると言える。

三 『金剛般若経略疏』における解・行

『搜玄記』と『孔目章』において、解・行という術語は以下の三つの意味で用いられていた。①修行者の理解と実践。②解・行の所依である第八識と第六識。すなわち、解の主体となる智慧と、行の依りどころとなる現象世界。③仏の境界としての解境・行境。このうち、第三の用例は、その意味内容や著作の成立時期から見ても、他の二つとは隔たりがある。しかし、これらの解・行の意味には連続性があり、それを示すのが、次の『金剛般若経略疏』の記述である。

智儼における解・行の変遷（櫻井）

仏言、乃至、云何住云何修行下、約^二其行事^一并^三三種般若^二。又、前解者、即約^二正說法身^一。又、後証行、即約^二正証法身^一。此可^レ思^レ準^レ之^三。

『金剛般若経略疏』では、本論にあたる解釈分の科段を、「約^二解心^一顯^二三種般若^一」と「約^二其行事^一并^二三種般若^一」とに二分し、解は正說法身、行は正証法身の立場にそれぞれ対応するとしている。この二つの法身が如何なるものであるのかについては、『金剛般若経略疏』では詳らかでないが、真諦訳『仏性論』に、これに近い名称を持つ二種の法身が説かれている。

諸仏法身有^二二種^一。一、正得。二、正説。言^二正得法身^一者、最清淨法界、是無分別智境。諸仏当体、是自所^レ得法。一、正說法身者、為^レ得^二此法身^一、清淨法界、正流從^レ如、所化衆生識生、名為^二正說法身^一。

無分別智の境界では、諸仏の当体こそが得るところの法に他ならないから、そのような観点から見た法身を正得と呼び、また、法界が流出して所化の衆生の識を生成するという側面を正説と言う。この定義は、『孔目章』の二種十仏説と非常に近い関係にある。つまり、『金剛般若経略疏』で「解心」にあたる正說法身は、仏が衆生のために現す身である解境十仏と、「行事」にあたる正証（正得）法身は、仏そのものを意味する行境十仏と、それぞれ類似しているのである。『金剛般若経略疏』では、修行者の視点と仏の境界という異なる立場

を、解・行という語を接点として結びつけているが、これは『搜玄記』には見られない記述である。『金剛般若経略疏』と他の著作との前後関係ははっきりしないものの、解・行の意義の展開から考えれば、『搜玄記』、『金剛般若経略疏』、『孔目章』の順に成立したと推測することができる。何故、智儼は解・行という語に、仏の境界という意味を付したのだろうか。このことについて、智儼が『金剛般若経略疏』の科段を「約^二解心^一」と「約^二行事^一」としていることを手がかりに考察してみたい。

解心・行事の意味と関連すると思われるのが、前節②に挙げた『搜玄記』の二種唯識説における解・行の用例である。この『搜玄記』の説は、六十『華嚴』十地品・第六地の「三界虚妄、但是心作。十二緣分、是皆依^レ心^三」⁽¹⁰⁾より始まる一節に対する註釈中に論じられている。智儼は、第六地の經文を『十地經論』の説に従って十に分け、上述の一節は、依止一心觀という觀門にあたるとする。依止一心觀とは、「治^二彼外境自性執^一」⁽¹¹⁾と言われるように、三界は心、つまり阿梨耶識のはたらきに他ならないということを知り、法空を悟るための觀法である。六十『華嚴』の經文は、さらに「所以何者、隨^レ事生^二欲心^一。是心即是識。事是行。行^二誑心^一故名^二無明^一。」と続き、ここでの「心」は染心であり、物事に従って欲望が生ずるという煩惱の原因を説明している。よって、六十『華嚴』の文脈

に即すれば、「行事」とは迷いの世界におけるはたらきといった意味になるであろう。しかしながら、中国においてはこの「心」は真心の意味も含むと考えられていたのであり、⁽¹²⁾ 智儼も『搜玄記』ではこの「心」について、欲心である意識と、本心である阿梨耶識の二義を含むと主張する。⁽¹³⁾ そこから、本来は煩惱の作用である「事」、すなわち現象世界は、同時に仏果の作用でもあるという発想が生まれ、『仏性論』の二種法身との類似性を考えるに至ったと推測される。

四 結び

智儼における解・行という術語は、修行者の解・行から、仏の境界という意味でも用いられるようになり、その転換点は『金剛般若経略疏』にある。『金剛般若経略疏』の解心・行事という科段は、十地品の三界唯心の経文に基づくと推察され、智儼は『金剛般若経』の構成を解から行へという修行の次第として把握しようとすると同時に、法身のはたらきという側面からも捉えようとする。このことは解境十仏の出現とも関連して、晩年にかけての智儼の関心が事の側面に向かっていたことを示し、後の華嚴教学における事という概念の重要性にも繋がっていったと考えられる。

1 鎌田茂雄「華嚴哲学の根本的立場——法蔵における実践の解

智儼における解・行の変遷（櫻井）

明——、館野正生「解・行の用例に見る法蔵華嚴思想の形成」、参照。

- 2 大正三五・六〇頁下。
- 3 大正九・五五八頁中〜五五九頁中。
- 4 玉城康四郎『心把握の展開』六二五〜六四二頁、参照。
- 5 大正三五・六五頁中。
- 6 大正四五・五四七頁中。
- 7 木村清孝『初期中国華嚴思想の研究』四六〇〜四八五頁、参照。
- 8 大正三三・二四〇頁中下。
- 9 大正三一・八〇八頁上中。
- 10 大正九・五五八頁下。
- 11 大正三五・六四頁中。
- 12 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』五〇二〜五〇九頁、参照。
- 13 大正三五・六四頁下〜六五頁上。

〈参考文献〉

- 鎌田茂雄「華嚴哲学の根本的立場——法蔵における実践の解明——」
 （中村元編『華嚴思想』法蔵館、一九六〇年、四一九〜四四九頁）
 鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』（東京大学出版会、一九六五年）
 玉城康四郎『心把握の展開』（山喜房仏書林、一九六一年）
 木村清孝『初期中国華嚴思想の研究』（春秋社、一九七七年）
 館野正生「解・行の用例に見る法蔵華嚴思想の形成」（財団法人松ヶ岡文庫研究年報）一四号、二〇〇〇年、七五〜九七頁

〈キーワード〉 智儼、『金剛般若経略疏』、二種十仏説、依止一心観

（早稲田大学院）